



大図研京都ワンディセミナー 京都大学 桂図書館見学！

桂図書館は2020年4月に開館しました。コンセプトは“世界最先端の高度で創造的な研究を推し進めるための「グローバルな情報収集・発信機能」を発揮できる図書館”です。

開館当時は、新型コロナウイルス感染症の拡大の為に「緊急事態宣言」の発令などがあり、とても見学もできない状況でしたが、この度、念願の桂図書館の見学を実施します。開館当時に関わったスタッフからの詳しい説明や、図書館見学後に、桂キャンパスの見どころなどの解説も予定しています。教育・研究支援の最先端の空気を一緒に感じましょう。

開催日時：2024年5月18日(土)14:00～15:30

集合場所：

(第1次集合場所) 13:30 阪急桂駅改札前

※JR 桂川駅の場合は13:19 桂川駅前(ヤサカバス6系統)をご利用ください。

(第2次集合場所) 14:00 京都大学桂キャンパス B クラスター桂図書館前

<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja/access>

どちらかに集合ください。

案内人：長坂和茂氏 (京都大学 元桂図書館職員)

主催：大学図書館研究会京都地域グループ

参加費：会員 無料、非会員 500円

申込方法：以下のフォームからお申し込みください

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdJJsKs-YDu6uBiwa9LLpjuF6NI7hPmyaxh8jUZ0mjuCb1NJA/viewform>

申込締切：2024年5月15日(水)19:00

詳細HP：<https://www.daitoken.com/kyoto/event/20240518.html>

[目次]

大図研京都ワンディセミナー「京都大学 桂図書館見学！」	…	1
大図研関西3地域グループ合同例会		
「ネットで探せない『書誌の書誌』の書籍化の裏話」 参加報告	森 敬洋	2
第55回 全国大会について	…	4
グループ会費を0円にします！	…	5
会費ご納入のお願い	…	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com (大学図書館問題研究会京都地域グループ)

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

大図研関西 3 地域グループ合同例会
「ネットで探せない『書誌の書誌』の書籍化の裏話」 参加報告

森 敬洋

『探すツール—図書館、出版、メディアの書誌の書誌』(伊藤民雄著、日本図書館協会、2022)を初めて手に取った際、その奥深い書誌の世界に対し、筆者はとても胸を打たれたのを記憶している。というのも、およそ十年に渡り哲学や美学、表象文化論やメディア論を専攻してきた筆者にとって、本書のようないわゆる参考図書を積極的に参照してきた経験は決して多くはなかったからだ。大学に入学したばかりの頃こそ百科事典で事項を検索したり、また入門書の読書案内で参考すべき本を探索したりもしたが、とりわけ最低限の知識が身につくまで以降、思えば参考図書にもそれほど触れていないように思う—それゆえ、「書誌の書誌」というものにも無論、触れてはこなかった。末席ながら図書館員としても働く自身にとってそんな告白は恥ずべきことであるだけでなく、そんな筆者が本例会報告を執筆するのはいささか手に余る行為かもしれない。だがそれゆえに、本例会にて伊藤民雄氏より語られた「書誌の書誌」にまつわる世界は新鮮味に溢れていただけでなく、図書館情報学に関して誠に浅学な筆者にとっても、非常に示唆に富むものであったと考えている。以下、伊藤民雄氏による『探すツール』の執筆舞台裏を語った講演を思い返しつつ、例会レポートから筆者がどのような知見を得ることができたかという点まで、軽く整理したい。

データベース『図書館情報学文献目録 BIBLIS PLUS』の構築・公開による私立大学図書館協会賞の受賞に加え、研究者や教育者として多彩に活動する氏の起点は、約 30 年前のインターネット上における文献探索ツールの整理である。その活動は今日でも『インターネットで文献探索』(伊藤民雄著、日本図書館協会、2022)を通し継続的に発信されているが、こと『探すツール』においてはインターネット外にある情報資源も積極的に紹介されている点が印象的な違いだ。日本図書館協会ウェブサイトが本書を「文献調査において今やデータベースがあれば十分と思うかもしれませんが、データベースも必ずしも万能といえないのが実態です。ぜひ本書を活用し、文献調査の強化につなげてください」と紹介するように、本書はインターネットで探索できない情報も多分に含むだけでなく、その範囲は欧米や一部アフリカにまで広がられている。講演冒頭ではデニス・ダンカンの「どこに知識が収められているかを知っている者は、その知識をほぼ手中にしたにも等しい」という言葉が引用されたが(デニス・ダンカン『索引〜の歴史—書物史を変えた大発明』小野木明恵訳、2023)、有用な情報資源の探索及び入手を目標にする『探すツール』はまさに、知識を身に付けようとするあらゆる人々にとって大きな参照となる「書誌の書誌」であるだろう。

だがそうした方針ゆえ、執筆は多くの困難に直面している。何より、『探すツール』を構成する「ツール」そのものを入手することの難しさが、講演内では多く語られた。図書館情報学関連の情報を網羅的に検索可能な図書、論文、サイト等は発見できず、まして戦前の情報に関してはさらに確認ができないというフランスの状況が講演内で述べられたように、そもそも図書館情報学及び周辺領域を網羅的に検索可能な媒体があらゆる国家で作られているわけではない。それだけでなく、調査の末に情報資源を発見したと

しても、次にその情報資源へいかにアクセスできるかという問題が出現する。氏は物理メディアとしてのみ存在している情報資源は可能な限り現物入手に努めたようだが、とはいえ、氏の勤務する実践女子大学図書館及びその近隣図書館ではほぼ入手できた国内の情報資源に対し、少数の国立大学が一部のみ所蔵する以外にはアクセスが困難な海外の情報資源に対しては、多大な労苦が伴ったようだ。こうした問題に対し氏が試みた情報資源の入手法は多岐にわたり、代行依頼で比較的容易にアクセスできた東アジア、納税者番号が要求されるためにやや困難があったイタリア、或いはウクライナ侵攻と紙一重のタイミングで辛うじて入手に至ったロシア等、さまざまに一もつとも、代理業者経由で購入したにも関わらず届きさえしなかったと話された事例もある。ともかく、様々な経路やトラブルに見舞われつつも全世界から氏のもとに集まった情報資源たちは、様々な手法によって地道に翻訳され、その内容が『探すツール』に刻まれる。世界中からあらゆる情報を収集し、そして自らの手で地道に翻訳、組織化していくその過程における氏の労苦は、筆者にとってもはや計り知れないものだ。

こうして世界中から情報資源を収集した氏のエピソードは、インターネット外にある情報へのアクセスがいかに膨大な労力と時間を伴うかを示しているだけでなく、筆者にとってはこの点こそ、本講演中で最も肝要な点であったように思えた。というのも、情報社会を巡る哲学的議論の世界では、インターネットが私たちに強力に拘束しある種の視野狭窄を引き起こすという議論が、盛んにされてきたからだ。フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの偉大な小論「追伸—管理社会について」(『記号と事件』宮林寛訳、河出書房新社、1990=2010収録)を参照しよう。彼はそこでミシェル・フーコーが規律訓練社会と称したような権力者中心の社会から、権力者が消失したのちシステムによる私たちの包括的な管理=制御が実行される社会が出現することを指摘した。およそ30年以上前に編まれた本論は今日のインフラ化された情報社会を精確には想定していないだろうが、ある種の可視的権力体制から不可視的システムによる制御への以降を主張するその論調は、インターネットによって雁字搦めとなった今の私たちをどこか予見している。今日の情報社会は、私たちのあらゆる要素をデジタルデータとしてエンコードし—あるいはエンコードできない要素をノイズとして捨象し、そうして得た個人情報に基づき提示されるサジェストが、私たちの情報探索における主体性を奪っているのだから—こうした議論は「追伸—管理社会について」から10年前にフェリックス・ガタリと共著で書かれた著作『千のプラトー』(宇野邦一監訳、河出書房新社、1980=1994)にて、「機械」という言葉を軸に論じられた。今日の私たちが「機械」に隷属し、主体的な情報探索をしなくなっているのなら、「機械」からの解放、すなわちインターネット外へ目を向けることは、私たちの主体回復に大きく関与するといえよう。そしてこの点こそ、インターネットにおける情報探索行為の外部に存在する、エンコードされていない情報資源と遭遇することの重要性を、物語っているはずだ。講演内で氏が語った情報資源へのアクセスに関する苦難とはこうした点において、「機械」に縛られない外部を求める行為であるといえないだろうか。

とはいえ、「機械」に縛られない外部を発見しそれを組織化(システム化)する行為が、外部をシステムのうちに取り入れる、すなわち機械化に相当する行為である点には留意すべきだ。いわば、常にシステムを作成しつつも主体性を奪われないためには、システムは常にその輪郭を破壊しうるような外部を求める必要がある。こうした点において、「機械」が関与してこなかった外部を主体的に発見する「書誌の書誌」を継続して作成する氏の姿勢は常に、私たちにさらなる可能性を提示し続けてもいるだろう。『探すツール』発売以後にもさらなる情報資源を発見したことを報告する本講演最後における氏の

言葉は、そんな進化の可能性にも満ち溢れていたものであった。
いささか図書館情報学外の視点からの例会報告となってしまったが、今後なされるだろうさらなる発見へ大いに期待を向け、本報告を終わりにしたく思う。最後に、本報告を執筆するさなかで届いた『図書館界』2024年3月号に、小曾川真貴氏による『探すツール』書評が掲載されていた。専門家の視点より本書をより深く理解するための大きな一助となり得るものであろうため、ここで紹介しておきたい。

もり たかひろ(広島大学図書館)

第55回全国大会について

先日、メーリングリストで通知がありましたとおり、今年の全国大会はオンラインで2日間の開催になります。

開催日程 2024年9月21日(土)～22日(日)

開催方法 オンライン (Zoomを予定)

詳細はまた決まり次第、実行委員会からお知らせがあると思います。
皆様、参加をご検討ください。

大学図書館研究会京都地域グループは グループ会費を 0 円に値下げします。

大図研京都地域グループ会員の皆様へ

臨時地域グループ総会の決定を受け、2024/2025 年度より京都地域グループのグループ会費を **2000 円から 0 円に値下げ**します。活動が著しく低調であった昨年度の反省より、当面は前年度繰越金、地域グループ助成金を利用し活動いたします。

※臨時地域グループ総会議決の付帯により 5 年後再検討いたします。

2024/2025 年度より会費は、

5,000 円(大図研会費：5,000 円+京都地域グループ会費：0 円)/年度です。

※2023/2024 年度までの会費は 7,000 円(大図研会費：5,000 円+京都地域グループ会費：2,000 円)/年度となります。

未納の場合につきましては速やかに納入いただきますよう何卒よろしく願いいたします。

グループ運営委員は活発に研究交流会等の活動を行い、これまでの枠を超え、様々なかたちで会員相互の研修・経験交流の場の提供を推進します。皆様の活発なご参加・ご協力をお願いいたします。

◇ 会費ご納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

2016/2017年度(2016年7月～2017年6月)より、大学図書館研究会会費は、すべての会員の皆さまに、直接大学図書館研究会事務局へご納入いただいております。また、2023/2024年度臨時地域グループ総会にて2024/2025年度より京都地域グループ費が0円になることとなりました。

2024/2025年度より会費は、

¥5,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥0)/年度です。

※2023/2024年度までの会費は¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥2,000)/となります。未納の場合につきましては速やかに納入いただきますよう何卒よろしくお願いいたします。

【振込先】

郵便局 00190-2-79769 大学図書館研究会

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900 ■店番 019
■預金種目 当座 ■店名 〇一九(ゼロイチキュウ店) ■口座番号 0079769

ご不明な点は大学図書館研究会事務局(会費担当)(kaihi@daitoken.com)までご連絡ください。

※ 学生会員制度(試行)として、学生の方には特典をお渡ししております。

詳細は京都地域グループ Web サイトの「学生会員制度の試行について」をご覧ください。